

# 国立国会図書館蔵『豊臣公報君讎記』 解説并に翻刻本文

橋 村 勝 明

The transcription of "Toyotomiko kiminoadawo hozuruki"  
in the national diet library and its introductory comment

Katsuraki Hashimura

## 一、解説

ここに翻刻をする国立国会図書館蔵『豊臣公報君讎記』は、豊臣秀吉の御伽衆の一人である大村由己<sup>①</sup>が著した漢字表記文の、『惟任退治記』を假名交り文に改めたものである。その内容は、本能寺の変に於ける秀吉の功績を記したものである。

『惟任退治記』は、天正十(一五八二)年の奥書を有する。その翌年の天正十一(一五八三)年に『豊臣公報君讎記』が成立したことが、その奥書から見える。

大村由己は、『惟任退治記』の他、現存する資料として『播州征伐之事』『柴田退治記』『紀州御発向記』『関白任官記』『四国御発向并北国御動座記』『聚楽行幸記』『小田原御陣』、題名のみ伝わる資料として『西国征伐記』『大政所御煩平癒記』『金賦之記』『若公御誕生之記』が知られている。これらを総称して『天正記』とする。別に刊本の『天正記』が存在し、これは『惟任退治記』『柴田退治記』『紀州御発向記』『関白任官記』

『四国御発向并北国御動座記』『聚楽行幸記』『小田原御陣』を假名交りに改めて、『太かうさまぐんきのうち』等と併に、一書としたものである。漢字假名交り表記の『豊臣公報君讎記』と同じく、漢字表記の『惟任退治記』を假名交り表記に改めた本文として、『総見院殿追善記』が知られている。その奥書には次の如く記されている。

右一卷者杉原七郎左衛門尉家次篇秀吉御名代京都執權之聞此抄物常時之御名譽後代迄可相貽一冊也故研硯氷染禿筆為諸人一覽  
態交假字書之者也 徳庵叟永種筆

奥書を記した永種は、松永姓の連歌作者で、その子には貞徳がいる。大村由己とは親交が厚く、能筆であることが知られている。

『豊臣公報君讎記』の奥書には由己が秀吉の仰によって本書を記したと、又玄以の命によって書写したことが知られる。

右一卷者播州之住藻蟲齋由己蒙秀吉之仰作記之云々天下之司職玄以尊老巖命難辞之間乍憚避研藝展白楮陰昏鴉者也爲恐之

ここに見える玄以とは、後に秀吉死去の際に定められた五奉行の一人となった前田玄以<sup>②</sup>である。前田玄以が京都所司代に任ぜられたのが天正十一年であり、奥書中玄以を「天下之司職」としていること、又杉原家次が京都所司代の職にあつたのが、天正十一年迄であることから、『総見院殿追善記』の奥書には年号が入っていないが、その記事とあわせ考えると、両書が成つたのは天正十一年であると思われるのである。

『豊臣公報君讎記』の後書部分に見える書写奥書によれば、本資料が寛永十三年に松庵玄茂によって書写されたことが知られるのであるが、玄茂については未詳である。

『総見院殿追善記』の奥書によると、諸人に一覽する為に態と假名を交えて書いたものであることが知られる。漢字表記の本文を假名交り表記に改めることによって、国語文として如何なる変化が見られるのかというような、国語学上の価値については別に稿を用意することとして、本稿では若干の解説と翻刻本文を掲載することによって、広く紹介するに留める。

(注)

- (1) 大村由己については、庵谷巖「梅庵由己伝補遺」(山梨大学教育学部研究報告「第二八号」)に詳しい。
- (2) 本資料と同一内容及び表記を有する本文は、『総見院殿追善記』の他に、神宮文庫蔵「本能寺記」が存する。
- (3) 小高敏郎「新訂松永貞徳の研究」(臨川書店、昭和二八年一月初版、昭和六三年一〇月復刻版)の一七頁に詳しい。
- (4) 阿倍猛・西村圭子編「戦国人名辞典」(新人物往来社、一九九〇年九月)を参照した。

## 二、書誌

書誌について、簡略ながら左に記す。

み一五六号

江戸時代寛永十三年写、袋綴装、楮紙、「国立国会図書館」朱印、「明治九年文部省交付」朱印、界線ナシ、八行一七字、漢字平假名交り文、墨字訓アリ、朱引アリ、縦二九・八×横二一・〇

〇糹、三二紙、内題・尾題ナシ

(後補表紙外題) 豊臣公報君讎記

(原表紙外題) 豊臣公報君讎記

(原表紙右下) 安永丙戌仲秋十六夜至十七朝全再読畢

本資料の本文前後には比較的纏まった前書・後書が存する。それぞれ纏まった分量であるので翻刻し、「前書」「後書」として、資料の配置通り「本文」の前後に置いた。

## 三、凡例并に翻刻本文

(凡例)

- 一、漢字は原則正字体としたが、JIS漢字に無いものについてはそれに準ずる漢字を用いて表記した。
- 一、小書きの假名についてはそのまま小書き表記とした。又假名字体については、小書きの假名は底本の通り現行の片假名字体とした。
- 一、行頭には▲を付し、改丁最初の行頭には▲の右傍に「一才」の如く丁数と表裏とを表示した。
- 一、合字の「ふ」は「より」と表記した。又、「之」について假名・漢字の区別が判然としないものは漢字表記とした。
- 一、朱引は全て省略に従った。

(前書)

▲一信長公時代<sup>ニ</sup>由己一人天下無雙<sup>ノ</sup>儒學者也▲其比之歌學者永岡幽齋太子堂高英▲由己此三人之兼天下之名人也▲一太閤秀吉公與柴田修理柳瀬合戦之時▲福嶋市松諸軍勢之内一番鐘御感状有▲一番鐘石川兵助討死也▲二番鐘加藤孫六御感状有一騎當千▲三番鐘櫻井和泉守又若黨 同断▲四番鐘加藤虎之助 同断▲一 天正十年五月▲穴山伊豆守家康卿▲御同道ニテ信長公▲御禮ニ御上洛之砌如此▲△殿重タトヘハ紛<sup>ニ</sup>ナシトイハン爲也▲一 備中國高松城主者清水武藏守ト云也▲舟を浮て切腹也秀吉公より上使坂

尾茂助一 太閤秀吉公御内之四傑者木村常陸介▲前野但馬守中村式部少輔坂尾帶刀一 秀吉公者漢高祖比而可也▲漢高祖之四傑蕭何曹參韓信張良一 柴田修理亮勝家▲楚項羽比也▲史記高祖本記第八云▲項羽妬賢嫉能▲能有功者害之賢者疑之戰勝而不與人功得地而不與人▲利此所以失天下也一 柴田修理内佐久間玄蕃者一騎當千名大將也一 式目十六ヶ條承久兵亂時沒收地事▲但家人外下司店官の輩京方之咎▲雖露頭▲今更不能改沙汰之由去年被議定一 畢者不レ及異儀一 家康御内本多中務渡辺忠右衛門一騎當千也一

武田四郎勝頼之事信長記甲陽軍鑑有▲本多中務殿本多三彌殿此時合戦ニ手柄有▲三彌殿石塔銘▲此候道春書被申候也▲論語爲政第二孔子對曰舉直錯諸枉則民服▲注苞氏曰錯置也舉用正直之人廢置邪枉之人則民服其上也

公治長第五子謂公治長可妻雖在縲絏之中非其罪也以其子妻之注孔安國曰公治長弟魯人也姓公治名長也一 備中國高松城尾攻之一卷▲太閤様 大田三閑へ之御返事候也

(翻刻注)

- (1) 行頭墨書「御下知之刻」アリ
- (2) 行頭墨書「羽柴美濃殿内衆ナリ」アリ
- (3) 左傍墨書「一騎當千」アリ

(本文)

夫つらく世間の盛衰を觀する南山▲の春の花は逆風これを散し東嶺の秋の月今狂雲これを藏す千歳の松も斧斤の厄を免れず万代の龜も豈刎焦の憂なからんや種花の榮胡蝶の夢何をか羨何をか悲しまん抑贈一品左相府▲平朝臣信長天下棟梁し國家鹽梅たる事歳久し此先江州安土山城郭▲搆へ大石を以山を裹み東西の臺南北の臺金殿紫閣天上の雲に連なり玉樓粉牆▲湖水の波に輝く其の地の勝絶算言へからす添上

皇を始奉り日々勅使を立月▲卿雲客床を對し百官諸侯座を烈ぬ▲九重城闕今爰ありといひつへし三管領▲其外諸國主人稽首せざる者なし或は山野▲出時は數百連の鷹を集て狩場▲の遊を成或は京洛に上時は千萬騎の馬を競て馬場の興を成朝には擧直錯諸枉▲の政道を行夕には翠帳紅閨▲入て三千の寵愛を専とす日々の德行夜々の遊宴▲樂餘有彼驪山宮の榮花上陽殿の樂寧これに過へけむや▲武田四郎勝頼といふ者あり甲信兩國の領主として年來の朝敵たり故織田城介平朝臣信忠信州に至て出馬あり高遠の城を取卷勝頼▲舍弟仁科五郎并小山田備中守相踐地也川尻與兵衛尉調略を以即時攻崩悉これを討果す其競を以甲州葦崎府中▲入勝頼一戰に及はず敗北して天目山▲隱ぬ信忠先勢川尻與兵衛尉瀧川左▲近丞彼山中へ追詰數ヶ度合戦及終▲武田勝頼同嫡子太郎信勝同左馬助勝定逍遙軒に至まで彼一族悉首討▲來甲州駿州信州三箇國本意屬する旨▲上聞に達す仍御動座あり三箇國御一見之刻相殘關東の諸大名悉御味方▲馳參者也將軍年來富士山御見物之▲望あり斯山は天竺支那扶桑三國無雙の名山也然を今吾山と成て見る大望を達する快喜斜ならずそれより遠州▲參州に赴き徳川參河守家康の館▲至て御滯留あり厥后親子相共御馬を納給▲扱も羽柴筑前守秀吉は去天正六年▲播州馳下別所を退治してより以降西國征伐の軍主を給備前美作之守護▲宇喜多を手

に屬し播磨但馬因幡五ヶ國の人數を引率し天正十年三月十一日備中國馳向冠城に押寄敵の備尤剛強也然に此城おいては縦人數を損すといふとも無二に攻敗西國の響と成へき旨兼て相定畢即杉原七郎左衛門尉荒▲水平大夫千石権兵衛尉先彼地の肝要たる水手に攻入是をとる秀吉感悦して彼兩三人に馬太刀を遣はす城より種々懇望を盡すといへとも承引なく萬牛五丁の攻を成て即時に乘込悉首刎畢ぬ▲時日移さず河屋城を取卷彼城主寄▲手の威猛をみて毛利家の援兵を待▲すして搔櫓を下し甲を脱て降參する間▲命扶追逃す其後高松城に寄てみる▲三方澤沼あり曾人馬の通なし一方は重々大堀を構毛利家より數年相搆たる要害也縦

日本國を寄攻とも輒力▲攻に及へからず然間秀吉工夫して水攻に▲すへき行なす城の廻二三里の間山とひ▲としく堤を築材木をよせ槌▲をかき大河▲小河の水上を尋山を堀岩石を切抜溪戸▲溝川田邊の溜水までも悉流懸忽▲彼地を一の湖水となす新く築出堀▲上には▲付城數ヶ所相拵大船を造筏▲を組敵城▲二九攻込合壁屋宅引拂甲丸一ヶと成す▲敵の軍士水の漲に隨て大木の梢に床を▲搔板を搦む波に漂▲舎宅は只舟の人▲たるか如し寔籠中の鳥綱代の魚の悲も▲是に過へからず又人數一萬餘騎引分▲五町十町か間を隔て置之後詰手當の▲爲也然處か毛利右馬頭輝元小早川左衛門尉隆景吉川駿河守元春彼高松城▲救を成へし偏▲備中表▲をひて骸▲曝▲へき旨議定▲して分國十箇國の人數▲八萬餘騎を引率して備中國高松の▲續積迦峯不動嶽に陣を取敵間十町▲過す其程▲川有故▲左右方相懸事▲得す▲然に秀吉彼後詰に切懸追崩へき事屑▲ならす即當日に西國一篇に屬すへき旨▲上意を得給ふ處に御下知を成下卒爾▲合戰然へからず即御説を堀久太郎▲池田▲勝三郎中川瀬兵衛高山右近丞を相添▲悉遣す▲將軍は信忠を相語御上洛有▲畢て惟任日向守光秀を軍使として着陣▲秀吉と相談すへし合戰の實否によつて▲御動座有へき旨▲嚴重也惟任▲公儀を▲奉り二萬餘騎を揃▲備中へは下らずして▲密に謀反を工併當座の存念に非す年▲來の逆意識察する所也五月廿八日愛宕▲山▲のほり一座之連歌を催す光秀発句云

▲時はいまあめかしたしるさ月かな

▲今是を思惟するに誠に謀反の先兆也然▲天正十年六月朔日夜半より彼二萬餘▲騎を延▲丹波國龜山を立四條西洞院本能▲寺相府の御所へ押寄將軍此事夢▲知召給はず宵には信忠を近付常よりも▲親く我壯年の昔を語且は思殘ことなき▲果報を悦ひ兼は萬代長久の榮耀を工▲村井入道春長其外近習の小性以下▲至▲まで憐愍の御詞を加給ふ深更▲及間信忠▲御暇乞あり妙覺寺の屋形▲還入給ぬ▲將軍も深閑に入佳妃好嬪を▲集鴛鴦▲の衾連理の枕夜半の私語誠▲世間の夢▲の限に非すや惟任は少途中▲ひかへ魁と

して▲明智彌平次同勝兵衛同次右衛門同孫十郎▲齋藤内藏助其外諸卒四方人數を分▲御所の廻を取巻夜も明闇▲時分合壁引▲壞門木戸切破一度に颯と亂入▲將軍▲御運の盡處は近頃天下靜謐の條御用心も▲なく國々の諸侍或は西國出張或東國▲警固として殘置又織田三七信孝四國▲渡海あるへき調儀として惟任五郎左衛門尉▲長秀蜂屋伯耆守相添和泉津▲在陣▲其外諸侍西國御動座御供用意の爲▲在國せしめ無人の御在京也偶御供の人々も▲洛中所々に打散思々遊興にて御番所には▲漸小性衆百人▲過さる也▲將軍夜討とや▲聞含森亂を近付問給ふ惟任謀反の由▲申上る怨を以恩を報する謂様なき▲非す▲生ある者の輿する事定道也今更驚▲へきにあらずと弓乙執廣縁さして出給▲向兵五六人射伏後は十文字鎌にて敵▲數輩懸倒門外まで追散し數ヶ所御疵▲被御座所さして入給ふ森亂を始として高▲橋虎松大塚又一落合小八郎菅屋角藏▲中尾源太郎薄田與五郎狩野又九郎▲湯淺甚介馬乘勝介針阿彌等思々▲働て▲一端防戦といへとも多勢▲攻立られて悉討▲果ぬ▲將軍日比は春花か秋月かと旣給ふ▲紅紫粉黛を悉指殺し御殿▲手つから▲火を懸て御腹召畢ぬ村井入道春長は御▲門外▲家あり御所の震動するを開始は▲喧譁と思ひ物具取あへす走出相鎮▲と思ひ▲是を見るに惟任人數二萬餘騎圍をなす▲一所▲懸入らんと思ひ術計を盡といへとも叶▲はず然間信忠御陣所の妙覺寺へ馳參此▲旨申上る▲信忠は是非本能寺へ懸入語▲共▲腹を切へき僉議ありといへとも敵重々▲堅固の圍なれば天を翔翼ならては通路▲叶かたし誠に咫尺千里歎ても餘有然に妙▲覺寺は淺間の所なり近邊何方にか腹を▲切へき館やあると問給春長承忝も▲親王御座二條の御所こそ然へけれとて即▲案内を申▲春宮をは輦にて内裏へ移奉て▲信忠纔▲五六百計にて入給ふ馳加もの一千▲餘騎御前▲ある人々は御舍弟▲御坊織田▲又十郎村井春長團平八菅屋九右衛門尉▲親子三人福富平左衛門猪子兵助下石彦▲右衛門野々村三十郎赤澤七郎右衛門齋藤▲新五津田九郎次郎篠河兵庫助毛利▲新介塙▲傳三郎桑原吉藏水野九藏小山▲田彌太郎櫻木傳七小澤春日源八此外歴々▲諸侍思切惟任か寄來を待懸た

り惟任者▲將軍に御腹を召御殿に火焰の上を見て▲安堵の思を成て信忠御陣所を尋ぬるニ▲條の御所に橋籠給由を聞人馬ニ息をも續せす即時に押寄御所ニハ勿論覺悟前追手▲を引開弓鐵炮を前ニ立竝内ニ扣▲軍兵▲思々の得道具を持前後を鎮て竝居たり▲魁兵共面も憚す懸けり使の弓鐵炮にて▲差取引取射退て排▲處ヲ衝て出追拂▲推込れ數刻防戰敵は六具と固荒手を▲入替々々▲攻來味方は素膚唯一計也心は▲剛に勇といへとも長鎗大打物にて刃を揃▲攻戰程▲爰にては五十人彼にては百餘人殘▲少討なされ御殿間近く詰寄たり信忠御▲兄弟御腹卷をめされ御近習の面々も百人▲計具足を着し信忠一番▲切出面▲進兵十七▲八人切伏御傍の人々も我劣らしと火花を▲散し相戰四方へ颯と追散す其時明智▲孫十郎杉生三右衛門加成清次其外究竟▲兵數百人名乗て取返し切懸信忠御覽▲眞中▲切入日頃稽古し給兵法古流當▲流秘傳の一太刀返も奥儀盡して切廻り▲孫十郎を切伏給▲續清次三右衛門か首丁々▲と打落す御近習の面々も力の限切合内▲攻▲入敵の人數殘少▲討果す最後の合戰殘所▲なし▲將軍御供可申とて御殿の四方へ▲火を懸眞中▲取籠御腹十文字▲切給其外▲の精兵思々に自害して一度に焔と成けり▲將軍御歳四十九信忠御歳廿六惜へし▲悲へし上下萬民皆愁涙に沈すと云事▲なし又濃州住人松野平助一忠其夜は▲邊土に在しか夜討の由を聞馳來處に▲御所之軍散し父子御腹▲召問力及はず▲妙顯寺へ奔入追腹を切へき覺悟を定畢▲一忠元來不肖の身也醫道を専とし常歌▲道▲心を懸又武を兼たる士也又參學▲眼▲曝故▲辭世として一首の歌一句の偈云

▲そのきはにきえのこる身のうき雲も

▲つゝにはおなしみちの山風

▲手握活人三尺劔即令截断一乾坤

▲かくのこく書置腹十文字に搔臆腑を▲蹴出し死す無比類働とて諸人皆感涙を▲催けり惟任は洛中をしつめ勝龍寺▲勝兵衛▲殘置其日の午刻計▲坂本の城▲至安土山▲此旨傳聞之宿直の番衆を始めて前夫人北▲方西之對東南之局之妾古後達奴婢雜▲人▲至迄かち裸足にて散々▲逃走▲將軍御

在世の時はた、假初の性還▲も駕輿▲飾り車▲千乘萬騎之驂▲にて美々數粧今更▲引替愁苦辛勤の消息たとへは唐玄宗▲楊貴妃祿山か兵塵に蜀道の難悲▲凌▲楚項羽の虞美人高祖の攻を受烏江の波▲漂うれひ何そこれに異ならんやさて惟任▲安土に入御殿にうつり樓閣にのほり此年月▲集給ふ數寄の道具天下の重寶金銀珠▲玉綾羅錦繡に至まで悉取脚長濱棹▲山に亂入し江州一篇に相從へ六月十日▲坂本に歸城す然▲惟任合體の侍丹後守護▲長岡兵部太輔藤孝大和國守護筒井▲順慶へ京都の趣注進せしむる急度上洛▲あるへき旨再三使札を遣はずといへ共逆意▲たる間相與せざる者也又泉堺に在陣せし▲織田三右衛門孝惟任五郎左衛門尉長秀傳聞▲織田七兵衛信澄は惟任所縁たる故又▲將軍へも意趣なきに非ず旁大坂へ押寄▲討果者也扱も備中表には六月三日夜半計▲密に注進あり秀吉是を聞心中の愁傷限▲なしといへとも少も色に出さず彌陣を張寄▲日畑の要害籌策を以現形せしめ其外一統▲の者悉引着其時秀吉狂歌をよみて諸陣▲觸也

▲兩川のひとつになつておちぬれは

▲もり高松も深くつにそなる

▲扱高松城大將五六人に腹を切せ殘黨相扶▲へきの旨降參致す又毛利家より條々懇望有▲分國の内備中備後伯耆出雲石見以上▲五ヶ國を渡進誓紙を添人質を出御旗を▲讀へき由再三申來然▲高松の事有情の類▲雜犬に至まで悉攻殺し毛利家をひては▲其根を断其葉を枯すへき存念たりといへ共▲先速▲京都の本意を達すへきとの思惟▲以▲主人三人▲腹を切せ雜兵扶▲杉原七郎左衛門を▲檢使として城内を請取丈夫▲人數を入置▲毛利家懇望條々の旨▲まかせ五ヶ國▲誓▲紙人質を請取先毛利家の陣を拂はせし秀吉は心靜にもてなし六月六日未刻備▲中表を引備前國沼城▲至七日大雨疾風▲數ヶ所の大河洪水▲凌姫路▲至廿里計其日▲着陣して諸卒相揃はずといへとも九日に姫路を▲立晝夜の境もなく打上程▲攝津國尼崎▲至秀吉着陣之條池田紀伊守惟任五郎▲左衛門尉堀九太郎各相談攝州富田▲陣▲取先の人數は天神馬場山崎▲至て取續▲惟任か行を見合惟任は秀吉着陣▲事少

も▲知す勝龍寺の西山崎東口まで陣をとる▲各相談云秀吉今西國にて鈎留の條急▲度攝州▲至て勦をなし播州▲亂入すへし▲然者秀吉敗軍すへき間國境にて悉討果▲へしと評議▲する半秀吉昨今の間富田▲山崎に着陣の由注進あり惟任案▲相違▲して俄▲三行を改人數▲立替一戰▲及へき▲覺悟をなす秀吉人數備中備前▲相後者▲多し故▲一萬餘騎▲過す然▲織田三七惟任▲五郎左衛門堀九太郎▲攝州衆相加もの也▲秀吉日頃即合戰念の太刀思ひ詰たる有▲様寔天魔波旬をも欺へし川手中筋に▲右之軍勢を分三筋に鎧を作り衝出惟任▲人數段々▲立置數刻防戰處中筋山川▲の兩手一度▲箕手を廻し矢楯も瀦らす▲即時▲追崩悉敗軍す惟任近習衆三千▲計一手▲堺勝龍寺▲楯籠方々▲北走輩或▲久我繩手或西岡桂川淀鳥羽▲至テ追詰▲々々打殺す丹波の路筋へも入切落武者▲一人も遁さす討殺す即勝龍寺へ人數を▲よせ四方四面▲陣執悉挫へしと行を成所▲惟任これをみて先非を悔といへとも叶はず▲今夜退城せずは擒と成へき事眼前也先▲一端坂本城に楯籠時節を待へき思惟を▲なして夜半計▲密に五六人▲告知此地は▲案内者也大道をは通らすして藪原の中▲田の畔傳忍々▲落行寄手は晝の合戰▲疲▲鎧の袖を數干戈を枕とす其間▲勝龍寺▲圍を落出城内▲惟任が落を聞て我先▲と崩出或外間に寄合或待伏に行過▲過半▲遁さるもの也堀堀九太郎は軍前後江州▲を指て打出又安土山▲明智彌平次惟任▲敗軍の趣を聞届彼金銀を鑲し宮殿▲樓閣を一度に焼拂一千餘騎を廻▲惟任に▲馳加らんとして打上大津に出るみちにて堀▲久太郎に行合即追立られ三百計うたせて▲彌平次は小船にとり乘坂本の城楯籠其夜▲の前後惟任追懇者多し霖雨頻にして▲敵味方其類別をしらす山科醍醐相坂▲又は吉田白川山中方々より首を打來者數▲知す秀吉其翌日三井寺に着陣す一日▲滯留を成處諸口より討來首悉轉檢▲するに其内に惟任首あり秀吉日來▲本望▲拊悦▲堪さる者也寔天哉命哉明智彌平次▲此由を聞て惟任か▲一類其身の眷屬悉▲指殺し殿守▲火を懸自害を成畢ぬ▲敵味方共▲相感する者也秀吉は大津より▲安土に至り是をみるに悉焦土となる様▲暁風殘月荒涼寂寞の消息往日歌舞▲遊宴の時何人かこれを

思はん誰人か是を怪▲らん然▲江州北郡長濱には阿閉孫五郎▲惟任一味として在城す秀吉宿意なき▲非す▲故▲降參▲及はす長濱を明て我本の館▲引楯籠る秀吉元より惡事なれば何そ是を▲緩さんや即人數をつかはし阿閉か一類悉傑▲かくる也又棹山に楯籠逆徒等惟任五郎左▲衛門に對し懇望致す者也それより各尾州▲濃州▲至て勦を成す此時織田三助信雄柴▲田修理進勝家進々に出張あり清須▲をひて▲參會をなす平朝臣信忠嫡男を天下の▲主君と定織田三介信雄を尾州の屋形と定▲同三七信孝を濃州の屋形と定さて羽柴▲柴田惟住池田此四人として天下の政道▲行▲今度忠節の輩に知行を分宛分國▲定▲入魂すへき固をなし誓紙をとり替し▲各歸國し畢ぬ扱も齋藤内藏助利三者▲惟任討死をしらす堅田邊▲知音を頼み▲替居する處を方便擲捕來寔天運の▲極所也惜哉利三平生嗜所々武藝のみ▲非す外には五常を專として朋友と會し▲内には花月を翫て詩歌を學といへり今▲此難に逢事遺恨尤深し或人述曰異國▲の公治長は縲繼の中に在ても其罪にあらず▲本朝會我五郎時宗は繩をか、りて會稽▲の恥をす、く今以同之其後車▲乗洛中を▲渡し惟任首をは體▲繼て粟田口▲をひて▲兩人共に機に上る京童落書いはいく

▲しゅうのくひきるよりはやき討死は

▲これたうはつのしるしなりけり

▲合戦にまけすごろくのさいとうは

▲七めく、らば恥をこそかけ

▲惟任は數年將軍御厚恩を以共身を立▲屢榮花にはこる彌長久を希へき處▲何そや相公を討奉る事豈天罰ならむや▲六月二日に討奉れば同十三日▲汝か首を刎▲らる事因果歴前の道理也長岡兵部▲太輔藤孝は年來▲將軍の御恩惠淺からず▲然に今度惟任一味せず秀吉と心を合備中▲表へ飛脚を遣し其後江州濃州▲馳來▲各相談し歸國之刻京都▲をひて▲將軍御追善連歌を作日

▲墨染のゆふへやなこり袖の露

藤孝

▲玉まつる野の月のあき風 道院

▲分かへる陰の松むし音になきて 紹巴

▲右の趣向等誠に天下諒闇のことはり愁涙餘▲有事尤也さて秀吉は御次丸を召供し▲重て上洛し 相公御腹をめさる、本能寺▲舊跡に分入落涙愁歎限なし秀吉所生▲元來貴にあらず 將軍御難擧ゆへ御▲義恩を蒙事其比類なし剩 相公第五▲御次丸を養子ニ下さる、然則者秀吉も▲同胞合體の侍なり御葬禮なくてはあるへ▲からず去なから歴々の年寄衆殊ニ御連枝▲おほし依之一端其憚を顧み斟酌を加へ▲六月より十月▲至迄聊の法事をも行はず▲猶是を案するに昨友は今日の怨讐昨花▲今日塵埃なれば誰ありて來日を期せんや▲誠に下賤の貧士貧女までも其跡を即▲其志を致す通法也況人君ニをひてをや▲今此事を勲すは千変萬化世間の體▲測量ヲ難レ成仍十月初於龍寶山大徳寺▲一七日法事ヲ催御佛事囑金雜用之▲爲ニ鳥目壹萬貫不動國行御劍又▲御位牌所ニ一字之精舎ヲ建立し▲總見院殿大相國一品泰嚴大居士ト號▲祠堂ニケ作事料ニ銀子十三拾枚渡ス▲又寺領五拾石後代迄無相違様ニ遠慮ヲ加へ八木五百石にて寺家計トシ買得シ寄進スル所也

▲扱法事次第

▲十一日轉經 十二日頓寫并施餓鬼

▲十三日懺法 十四日入室 十五日關維

▲十六日宿忌 十七日陞座拈香也

▲就中十五日御葬禮之作法諸人目ヲ驚す▲所也先棺槨をは金沙金欄を以裹軒▲の環珞欄干の擬寶珠皆金銀ヲ鑲ハ▲角の柱丹青を盡し八面の間採色紋桐▲沈香を以佛像を刻彫し棺槨の内に納▲奉り彼蓮臺野縱橫廣大なるニ四門▲の幕白綾白段子方百二十間之中火屋▲あり如法經堂造也惣廻ニ埒を結羽柴▲小一郎長秀警固大將として大徳寺より▲千五百丈の間警固の武士三萬計路の▲左右を守護し弓箭鐵炮を立續き▲葬場には秀吉分國の人数は云ニ及はず▲合體の侍悉馳集其外見物の貴賤雲霞▲のごとし御輿の前轅は池田小新後轅は▲羽柴御次丸昇也御位牌は相公第八男▲御長磨丸御太刀をは

国立国会図書館蔵「豊臣公報君鑑記」解説并に翻刻本文

秀吉持給ふ彼不動國▲行也兩縛ニ相連者三千餘人皆烏帽子▲藤衣を着す五岳を始として洛中洛外の▲禪律八宗九宗の僧侶幾千萬といふことを▲しらす其宗々の威儀を調へ又手問許集▲會行導す五色の天蓋は日ニ輝一様の▲幡は風ニ翻る沈水の煙は雲のごとく燈明の▲光は星に似たり供具盛物龜足造花▲七寶莊嚴九品淨土五百羅漢三千佛▲弟子目前ニ有かごとし

▲佛事役者次第

- ▲鎖籠 恰雲大和尚
- ▲掛眞 玉仲大和尚
- ▲起籠 古溪大和尚
- ▲念誦 春屋大和尚
- ▲奠湯 明叔大和尚
- ▲奠茶 仙岳大和尚
- ▲取骨 竹澗大和尚
- ▲乘火 咲嶺和尚大禪師

▲其偈曰

▲四十九年ノ夢一ノ場威名説ニ什ヲ磨  
▲存亡ニ請看火裏烏曇鉢吹作  
▲梅花遍界香 喝一喝  
▲其時秀吉御次丸相共ニ焼香し給十月▲十五日巳刻ニ無常の煙と成奉る是これ一▲生別離の悲也たれか歎さらん殊更涙の▲と、まらぬは秀吉雙眼也是 將軍の▲威氣天下ニ衣被し古今ニ獨歩する故上は▲上皇を安し奉り下は下民を憐む仍忝も▲勅使を立贈官を給ふ ▲總見院殿大相國一品泰嚴大居士ト號し奉る者也▲秀吉備中表にをひて武勇を専とし▲籌策を運さずはいかてか速ニ惟任を退治▲せん親本意を達し此孝養を行給ふ事▲秀吉一世の冥慮末代の龜鑑也仍記之▲萬歳々々珍重至祝而已  
▲天正十一年猛冬日 永種  
▲右一卷者播州之住藻蟲齋由己蒙▲秀吉之仰作記之云々▲今天下之司職玄

以尊老巖▲命難辭之間乍憚避研蓋展▲白楮陰昏鴉者也爲恐之

〔後書〕

▲<sup>三〇+</sup>貞永式目出來ノ歳ヨリ天正十年壬午ノ歳▲信長公御代迄三百五十年ニ當  
▲寛永十三年丙子▲二月十二日書寫之者也▲松庵玄茂（花押）  
▲此一冊申歳ニ書寫候▲又今校合者也▲一頼朝富士野牧狩より天正八年迄四  
百年ニ成

—以上—

〔付記〕

資料の翻刻に際しては、国立国会図書館より許可を賜った。  
記して感謝申し上げます。

—平成十四年九月十一日 受理—